

伝通院

永井荷風

青空文庫

われわれはいかにするともおのれの生れ落ちた浮世の片隅を忘れる事は出来まい。

もしそれが賑にぎやかな都会こゝろの中央であつたならば、われわれは無む限げんの光榮こうゑいに包つつまれ感謝かんしゃの涙なみだにその眼まなこを曇くもらして、一國いっこくの繁華はんかを代表だいひょうする偉大ゐだいなの背景はいけいを打目うちま成なるであらう。もしまたそれが見る影かげもない瘦やせむら村むらの端はれはずであつたなら、われわれはかえつて底知なつかれぬ懐なつかしさと同時に悲かなしさ愛あいらしさを感じかずるであらう。

進む時間じかんは一瞬いつしんごとに追憶おひぞくの甘あまさを添そえて行く。私わたしは都会こゝろの北方ほくほうを限かぎる小石川こいしかわの丘陵きゆうりやうをば一年いちねん一年いちねんに恋こひいしく思返おもひかへす。

十二、三の頃ころまで私は自分の生れ落ちたこの丘陵きゆうりやうを去さらなかつた。その頃の私わたしには知る由よしもない何かの事情じじやうで、父ちちは小石川こいしかわの邸宅ていさくを売う払はつて飯田町いいたまちに家いへを借かり、それから丁度ていど日清戦争にっしんせんの始はじまる頃ころには更さらに一番町いちばんちやうへ引移ひきうつつた。今いまの大久保おおくぼに地面ぢめんを買かわれたのはずつと後のちの事ことである。

私は飯田町いいたまちや一番町いちばんちやうやまたは新しい大久保おおくぼの家いへから、何かの用事もちがひで小石川こいしかわの高台たかだいを通とほり過する折まげにはまだ二十歳はたちにもならぬ学生がくせいの裏うら若わかい心こゝろの底そこにも、何なにとはなく、いわば興亡きやうぼう常じやうなき支那しなの歴代史れきだいしを通読とうとくした時のような淋しみしく物哀ものあはれに夢見ゆめみる如ごとき心持こゝろもちを覚おぼえるのであつ

た。殊に自分が呱呱ここの声を上げた旧宅の門前を過ぎ、その細密こまかい枝振りの一ひと条一すじ条にまでちやんと見覚えのある植うえ込こみの梢こすえを越して屋敷の屋根を窺い見る時、私は父の名札なふだの後に見知らぬ人の名が掲げられたばかりに、もう一足も門の中に進すす入みる事ができなくなつたのかと思うと、なお更にもう一度あの悪戯いたづら書がきで塗り尽された部屋の壁、その窓下へ掘つた金魚の池なぞあらゆる稚おさな時ときの古跡こせきが尋ねて見たく、現在そこ其処そこに住んでいる新しい主人の事を心憎く思わねばならなかつた。

私の住んでいる時分から家は随分古かつた。それ故、間もなく新しい主人は門の扉まで改築してしまつた事を私は知っている。乃すなち私の稚おさな時ときの古跡こせきはもう影も形もなくこの浮世からは湮いん滅めつしてしまつたのだ……

*

寺院と称する大きな美術の製作は偉大な力を以てその所在の土地に動しがたい或る特色を生ぜしめる。巴里パリにノオトル・ダームがある。浅草あさくさに観音堂かんのんどうがある。それと同じように、私の生れた小石川をば（少くとも私の心だけには）あくまで小石川らしく思わせ、

他の町からこの一区域を差別させるものはあの伝通院である。滅びた江戸時代には芝の増上寺、上野の寛永寺と相対して大江戸の三霊山と仰がれたあの伝通院である。

伝通院の古刹は地勢から見ても小石川という高台の絶頂でありまた中心点であろう。小石川の高台はその源を関口の滝に発する江戸川に南側の麓を洗わせ、水道端から登る幾筋の急な坂によつて次第次第に伝通院の方へと高くなつてゐる。東の方は本郷と相対して富坂をひかえ、北は氷川の森を望んで極楽水へと下つて行き、西は丘陵の延長が鐘の音で名高い目白台から、『忠臣蔵』で知らぬものはない高田の馬場へと続いている。

この地勢と同じように、私の幼い時の幸福なる記憶もこの伝通院の古刹を中心として、常にその周囲を離れぬのである。

諸君は私が伝通院の焼失を聞いていかなる絶望に沈められたかを想像せらるるであろう。外国から帰つて来てまだ間もない頃の事確か十一月の曇つた寒い日であつた。ふと小石川の事を思出して、午後一人幾年間見なかつた伝通院を尋た事があつた。近所の町は見違えるほど變つていたが古寺の境内ばかりは昔のままに残されていた。私は所定めずきりばり切貼した本堂の古障子が欄干の腐つた廊下に添うて、凡そ幾十枚と知れず淋しげに立連つた有様を今もつてありありと眼に浮べる。何という不思議な縁であろう、本堂

はその日の夜、私が追憶の散歩から帰ってつかれて眠った夢の中に、すっかり灰になってしまったのだ。

芝の増上寺の焼けたのもやはりその頃の事だと私は記憶している。

半年ほど過ぎてから、あるいは一年ほど過ぎていたかも知れぬ。私はその頃日記をつけていなかったたので確な事は覚えていない。或日再び小石川を散歩した。雨気を含んで重苦しい夕風が焼跡の石の間に生えた雑草の葉を吹きひるがえしているのを見た。

何しろあれだけ大きな建物がなくなつてしまつた事とて境内は荒野のように広々として重苦しい夕風は真実無常を誘う風の如く処を得顔に勢づいて吹き廻つているように思われた。今までは本堂に遮られて見えなかつた裏手の墳墓が黒焦げになつたまま立っている杉の枯木の間から一目に見通される。家康公の母君の墓もあれば、何とやらしい名高い上人の墓もある……と小さい時私は年寄から幾度となく語り聞かされた……それらの名高い尊い墳墓も今は荒れるがままに荒れ果て、土塀の崩れた土から生えた灌木や芒の茂りまたは倒れた石の門に這いまつわる野蔦の葉が無常を誘う夕風にそよぎつつ折々軽い響を立てるのが何ともいえぬほど物寂しく聞きなされた。

伝説によれば水戸黄門が犬を斬つたという寺の門だけは、幸にして火災を逃れたが、遠

く後方に立つ本堂の背景がなくなってしまうので、美しく彎曲した彫刻の多いその屋根ばかりが、独りしよんぼりと曇った空の下に取り残されて立つ有様かえって殉死の運命に遇わなかったのを憾み悲しむように見られた。門の前には竹矢来が立てられて、本堂再建の寄附金を書連ねた生々しい木札が並べられてあった。本堂は間もなく寄附金によつて、基督新教の会堂の如く半分西洋風に新築されるという話……ああ何たる進歩であろう。

私は記憶している。まだ六ツか七ツの時分、芝の増上寺から移つてこの伝通院の住職になつた老僧が、紫の紐をつけた長柄の駕籠に乗り、随喜の涙に咽ぶ群集の善男善女と幾多の僧侶の行列に送られて、あの門の下を潜つて行つた目覚しい光景に接した事があつた。今や〔Democratie〕《デモクラシー》とPositivisme《ポジチビズム》の時勢は一日に最後の美しい歴史的色彩を抹殺して、時代に後れた詩人の夢を覚さねば止むまいとしている。

*

安藤坂は平かに地ならしされた。富坂の火避地には借家が建てられて当時の名残の樹木二、三本を残すに過ぎない。水戸藩邸の最後の面影を止めた砲兵工廠の大きな赤い裏門は何処へやら取除けられ、古びた練塀は赤煉瓦に改築されて、お家騒動の絵本に見る通りであつたあの水門はもう影も形もない。

表町の通りに並ぶ商家も大抵は目新しいものばかり。以前この辺の町には決して見られなかつた西洋小間物屋、西洋菓子屋、西洋料理屋、西洋文具店、雑誌店の類が驚くほど沢山出来た。同じ糸屋や呉服屋の店先にもその品物はすっかり変つてゐる。

かつては六尺町の横町から流派の紋所をつけた柿色の包みを抱えて出て来た稽古通いの娘の姿を今は何処に求めようか。久堅町から編笠を冠つて出て来る鳥追の三味線を何処に聞こうか。時代は變つたのだ。洗髪に黄楊の櫛をさした若い職人の女房が松の湯とか小町湯とか書いた銭湯の暖簾を搔分けて出た町の角には、でくでくした女学生の群が地方訛りの嘆賞の声を放つて活動写真の広告隊を見送つてゐる。

今になつて、誰一人この辺鄙な小石川の高台にもかつては一般の住民が踊の名人坂東美津江のいた事を土地の誇となしまた寄席で曲弾をしたため家元から破門された三味線の名人常磐津金蔵が同じく小石川の人であつた事を尽きない語草にしたような時代

のあつた事を知るものがある。現代の或批評家は私が芸術を愛するのはパリ^{パリ}を見て来たためだと思つてゐるかも知れぬ。しかしそもそも私が巴里の芸術を愛し得たその Passion その Enthousiasme の根本の力を私に授けてくれたものは、仏蘭西^{フランス}人が Sarah Bernhardt に對し伊太利亞人^{イタリヤ}が Eleonora Duse に対するように、坂東美津江や常磐津金蔵を崇拜した當時の若衆^{わかいしゆう}の溢れ漲る熱情の感化に外ならない。哥沢節^{うたざわぶし}を産んだ江戸衰亡期の唯美主義^{ゆゑいぎ}は私をして二十世紀の象徴主義を味わしむるに余りある芸術的素質をつくつてくれたのである。

*

夕暮よりも薄暗い入梅の午後^{うしてんじん}牛天神の森蔭に紫陽花^{あじさい}の咲^{さき}出る頃、または旅^{たび}鳥^{がらす}の啼^なき騒ぐ秋の夕方^{たぐぞういなり}沢蔵^{おおえのき}稲荷^{おちば}の大榎^{おちば}の止む間もなく落葉^{おちば}する頃、私は散歩の杖を伝通院^{でんつういん}の門外^{かど}なる大黒天^{だいこくてん}の階^{きざはし}に休めさせる。その度に堂内に安置された昔のままなる寶頭^{びんずる}盧尊者^{ろんじや}の像^なを撫^なげ、幼い頃この小石川^{ふるさと}の故里^{ふるさと}で私が見馴れ聞馴れたいろいろな人たちは今頃どうしてしまつたらうと、そぞろ当時の事を思い返さずにはいられない。

そもそも私に向つて、母親と乳母とが話す桃太郎や花咲翁の物語の外に、最初の口マンチズムを伝えてくれたものは、この大黒様の縁日に欠かさず出て来たカラクリの見世物と辻講釈の爺さんとであつた。

二人は何処から出て来るのか無論私は知らない。しかし私がこの世に生れて初めて縁日というものを知つてから、その後小石川を去る時分までも二人の爺は油煙の灯の中に幾年たつても変わらないその顔を見せていた。それ故あるいは今でも同じ甲子の夜には同じ場所に出て来るかも知れない。

カラクリの爺は眼のくさつた元氣のない男で、盲目の歌うような物悲しい声で、「本郷駒込吉祥寺八百屋のお七はお小姓の吉三に惚れて……。」と節をつけて歌いながら、カラクリの絵板につけた綱を引張つていたが、辻講釈の方は齒こそ抜けておれ眼付のこわい人の悪るそうな爺であつた。よほど遠くから出て来るものと見え、いつでも鞋に脚半掛け尻端折という出立で、帰りの夜道の用心と思われる弓張提灯を腰低く前で結んだ真田の三尺帯の尻ツペたに差していた。縁日の人出が三人四人と次第にその周囲に集ると、爺さんは煙管を啣えて路傍に蹲踞んでいた腰を起し、カンテラに火をつけ、集る人々の顔をずいと見廻しながら、扇子をパチリパチリと音させて、二、三度つづけ様

に鼻から吸い込む啖唾を音高く地面へ吐く。すると始めは極く低い皺唄れた声が次第次第に専門的な雄弁に代つて行く。

「……あれえツという女の悲鳴。あなたは三本木の松五郎、賭場の帰りの一杯機嫌、真暗な松並木をぶらぶらとやつて参ります……」

話が興味の中心に近いて来ると、いつでも爺さんは突然調子を変え、思いもかけない無用なチャリを入れてそれをば聞手の群集から金を集める前提にするのであるが、物馴れた敏捷な聞手は早くも氣勢を洞察して、半開きにした爺さんの扇子がその鼻先へと差出されぬ中にばらばら逃げてしまう。すると爺さんは逃げ後れたまま立っている人たちへ面当がましく、「彼奴らア人間はお飯喰わねえでも生きてるもんだと思つていやがらア。

昼 鳶の持 逃野郎奴。」などと当意即妙の毒舌を振つて人々を笑わせるかと思うと罪のない子供が知らず知らずに前の方へ押出て来るのを、また何とかいって叱りつけ自分もおかし可笑そうに笑つては例の啖唾を吐くのであつた。

縁日の事からもう一人私の記憶に浮び出るものは、富坂下の菑蕪閻魔の近所に住んでいたとかいう替女である。物乞をするために急に三味線を弾き初めたものと見えて、年は十五、六にもなるらしい大きな身体をしながら、カンテラを点した薦の上に坐つて

調子もカン処どこも合わない「一ツとや」を一晩中休みなしに弾いていた。その様子が可笑しいといので、縁日を歩く人は大抵立止つては錢を投げてやった。二年三年とたつ中に警女は立派な専門の門附かどづけになつて「春雨」や「梅にも春」などを弾き出したがする中うちいつか姿を見せなくなつた。私は家の女中が何処から聞いて来たものか、あの警女は目も見えないくせに男と密通くつついて子を孕はらんだのだと噂しているのを聞いた事がある。

これも同じ縁日の夜よに、一人相撲ひとりずもうというものを取つて錢を乞う男があつた。西、両りょうご国、東、小柳こやなぎと呼ぶ呼出し奴やつこから行司ぎょうじまでを皆一人で勤め、それから西東の相撲の手を代り代りに使い分け、果は真裸体まっぱだかのままズドンと土どろの上に転ころがる。しかしこれは間もなく警察から裸体はだかになる事を禁じられて、それなり縁日には来なくなつたらしい。

*

金剛寺坂こんごうじざかの笛熊ふえくまさんというのは、女髪結おんなかみゆいの亭主おんで大工の本職を放擲うつちやつて馬鹿ばか囃子ばやしの笛ばかり吹いている男であつた。按摩あんまの休斎きゅうさいは盲目はなしかではないが生付いての鳥目とりめであつた。三味線弾きになろうとしたが非常に癩かんが悪い。落話家はなしかの前座まえざになつて見たがや

はり見込がないので、遂に按摩になつたという経歴から、ちよつと踊もやる落話おとしばなしもする愛嬌者あいきようものであつた。

般若はんにやの留さんとめというのは背中一面に般若の文身はりものをしている若い大工の職人で、大夕おとよりブサに結つた鬘まげの月代さかやきをいつでも真青まつさおに剃つてゐる凄まじいような美男子であつた。その頃にはまだ鬘まげに結つてゐる人も大分残つてはいたが、しかし大方は四十を越した老としより人ばかりなので、あの般若の留さんは音羽屋おとわやのやつた六三ろくさや佐七さしちのようなイキなイナセな昔の職人の最後の面影をば、私の眼に残してくれた忘れられない恩人である。

昔は水戸様から御扶持ごふちを頂いていた家柄けいだとかいう棟梁とうりやうの悴せがれに思込まれて、浮名うきなを近所うたに唄うたわれた風呂屋の女の何とやらしいのは、白浪物しらなみものにでも出て来そうな旧時代の淫婦おしろいであつた。江戸時代の遺風としてその当時の風呂屋には二階があつて白粉おしろいを塗つた女が入浴の男を捉たわむえて戯たわむれた。かくの如き江戸衰亡期の妖艶なる時代の色彩を想像すると、よく西洋の絵にかかれた美女の群むれの戯れ遊ぶ浴殿よくでんの歓楽さえさして羨むには当るまい。

*

小石川は東京全市の発達と共に数年ならずしてすっかり見違えるようになってしまおうであらう。

始めて六尺横町の貸本屋から昔のままなる木版刷の『八犬伝』を借りて読んだ当時、子供心の私には何ともいえない神秘の趣を示した氷川の流れと大塚の森も取られるに間もあるまい。私が最後に茗荷谷のほとりなる曲亭馬琴の墓を尋ねてから、もう十四、五年の月日は早くも去っている……。

明治四十三年七月

青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 一」岩波書店

1981（昭和56）年11月17日第1刷発行

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそつて、あらためました。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年4月15日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

伝通院

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>